

1 年道徳報告書⑦

1 年主任 佐野修一郎 R3. 12. 1

今回の教材は「公平とはなんだろう」です。主題は「公正、公平、社会正義」です。

義足のアスリートのレーム選手が、走り幅跳びで国際陸連の出した条件をクリアできず、オリンピックを諦めた例から、公平について考えました。考えなければならない点は、カーボン製の義足が、健常者の足より有利なのではないかということです。つまり、テクノロジーをどこまで認められるかという点です。この教材は、公平な社会を作るために、物事の是非を見極め、積極的に差別や偏見をなくそうとする態度を養うのがねらいです。

ちなみに、この教材の時の彼の記録は、リオデジャネイロオリンピックでの8.21mですが、2021年5月の大会にて8.62mという記録を出しています。そして、東京オリンピックの優勝記録は8.41mでした。さらに、パラリンピックでのレーム選手は、8.18m跳び、もちろん優勝しました。つまり、記録の上だけであれば、彼はオリンピックでも優勝争いのできたのです。



○差別や偏見のない社会を実現するために、身近でできることを考えましょう。

- ・言葉に気を付ける。「～なのに。」などは言わない。)意識的に差別しがちなこと(障害者など)を考え直す。
- ・自分は健常者として、トイレの多目的施設は避けたりしています。そして、誰もが自分らしさを発揮できる社会になっていくと良いと思います。
- ・人の努力を認めることで、差別や偏見はなくなっていくと思う。
- ・自分自身がジェンダーフリーなどの偏見をなくしていく、しかし、他人には他人の考え方があり、他人の考え方を尊重すると難しくなると思う。
- ・誰とでも嫌だと思わずに話をしていく、また、他人の意見を簡単に否定せずに、受け入れようと思ひながら聞くことも大切だと思います。
- ・世の中の常識や、「当たり前」のことをする。いじめなどの常識外のことをしない。何も知らない人を知らないことで、差別・偏見をしない。

○今日の授業で感じたことを書きましょう。

- ・自分が良いと感じることで、他者には良くないと感じることがある。あいまいな感じで決めるのは難しいけれど、相手の心や自分の心を見つめ直していくことで解決していきたい。すごく難しいと感じた。
- ・「公平と不公平」って難しいんだなあ～と思いました。目線次第で、気持ちが変わるから(レーム選手のこと)「絶対に支持」はさすがに無理だと思った。
- ・差別のニュースとかをよく見るけれど、ひどいと思います。しかし、差別されている人が、抵抗していて勇気があると思います。
- ・公平・不公平にも、たくさんの種類があって、年齢・障害・体格などがあるけれど、誰もが公平と言える社会づくりに、できる限り協力したいと感じた。
- ・今日感じたことは、公平さは人によって変わるんだなということです。来奈さんの言うとおりに、(オリンピックを)見る側とやる側によって、意見は変わると思います。
- ・人と違っていても、自分の努力でオリンピックに出場できるほどの力をつけたことはすごいと思った。そこで周りの人が、色々なことを言うから公平な社会がつかれない思った。
- ・この世には、それぞれの人の体格、特徴があるから、それらを理解して、一人一人が生活しながら考えていくべきだと思った。

(裏面に続く)

----- キリトリセン -----

ご意見・ご感想をお待ちしております。今後の授業計画の参考にさせていただきます。

お子様の名前 ()

- ・オリンピックとパラリンピックは、平和の象徴なのに、オリンピック内でも差別や偏見があることに、とても残念に思えた。
- ・もし、私が障害者だったら、レームさんみたいにがんばれないと思いました。もう諦めて辞めると思いました。だから、レームさんはすごいです。見習いたいと思います。
- ・公平はその人によって様々だと思った。この授業でも賛成の人も反対の人もいたが、自分の意見とは違っても認めることも大事なことだと思った。
- ・この授業で感じたことは、差別をなくすことです。いじめたりするのは、良くないことなので、止めたら差別をなくせると思っています。
- ・ひとそれぞれの事情によって苦労するので、スポーツは公平だと思っていたけれど、テクノロジーなどによって、不公平になるということもあることが分かりました。
- ・差別や偏見などをするとことで、その人も気分が悪くなるし、それを聞いた一部の人も気分が悪くなります。誰かが、差別や偏見を言うてしまうと他の人も言うてしまう…。だから、自分のことばかりを考えてもの言わない。他の人の気持ちも考えること。

○「道徳報告書6」への保護者からの感想

第6回の教材は「本の世界よ、みんなに届け 村岡花子」です。「伝えたい思いを、それぞれ素直に受け止め、また大切にしたいことを考えられることは、とても良いと思いました。なんでも取り組むために、何のためにやるのか具体的な目標を持つことはとても大切だと思いました。命がけという当時の社会情勢は、二度とあってはならないことですが、いつでもあたり前ではないことなども、この時期に学ぶことも大切だと思いました。道徳、心の授業が今の子ども達の心に残って欲しいです。日々、ありがとうございます。」

「赤毛のアンは、子どもの頃、アニメで見たことを思い出しました。正直、詳しい内容は覚えていませんが、心が育つ内容ということは覚えていいます。私も大人になって改めて赤毛のアンを読み、今どんなふうにとらえるか、楽しんでみたいと思いました。」

今回も2名の方から感想を頂きました。教員の独善的な指導にならないように、双方向の道徳授業の実現を目指しています。そこで、是非ともご意見をお寄せください。頂いたご意見を今後の道徳の授業に活かし、より良い授業展開をしたいと考えております。

さて、「赤毛のアン」は、私の大好きなシリーズです。

シリーズ8作目の「アンと娘リラ」までを小学校5年生の時に読みました。シリーズ9作目の「アンと想い出の日々」は大人になってから読みましたが、小学生の時と同じ感動を味わいました。アクションもサスペンスもない日常の物語なのですが、登場人物が愛らしい上に、微笑まずにはいられないストーリー展開なので、グイグイと引きつけられるのです。まだ読んでいない人には、是非、読んで欲しい本です。

「本の世界よ、みんなに届け 村岡花子」の主人公である村岡花子さんは、NHKの朝の連続ドラマの主人公にもなりました。自身の厳しい家庭環境から、子どもたちの成長のためには、良い家庭文学との出会いが大切であると考え、人生をかけて海外の良書を翻訳し、出版していきます。今の日本人は、彼女の思いを引き継いでいるのでしょうか？子どもたちに良い本との出会いを勧めているのでしょうか？今、子どもたちが視聴しているものは「赤毛のアン」や「王子と乞食」のように健全な心を育ててくれているのでしょうか？この道徳の授業をしながら、私は心配になってしまいました。なぜなら、「赤毛のアン」を読んだことのある生徒は5人もいませんし、「王子と乞食」にいたっては、誰も読んでいませんでした。これでは、「最後の一葉」で有名なO・ヘンリーなども読んだことはないのではないでしょう。

子どもたちに良書を薦めていくのは大人の義務です。今からでも、良書を1年生諸君に紹介していきましょう。

